

学習センターの実践活動から見えるチューターの 社会人基礎力養成の可能性 (名桜大学言語学習センターの事例から)

笠村 淳子 (名桜大学リベラルアーツ機構)

テーマ

理想的な学習支援およびチューターあるいはチューター育成とは？

ラウンドテーブルのまとめ

- 1) 高等教育機関での「学習支援」はほとんどの場合、大学のポリシーやカリキュラムとかけ離れた立場としてフォーカスされることが多いとの意見があり、本来の学習支援は個々の高等教育機関のポリシーを土台にしたカリキュラムと親密に連携する必要があることが指摘され、改めて学習支援の基礎の部分を考え直す機会となりました。
- 2) 学生をチューターとして採用（あるいは雇用）することは、安易に学生の「労働力」を効果的に活用しているのではなく、学生がチューターとしての経験を積むことで、自身の成長を促す経験すなわち「人材育成」としての経験を提供している視点を持つことは大事であり、その観点から、チューターを「労働」の対象ではなく「人材育成」の対象として捉え、成長を促す指導が必要であるとの意見があり、チューター制度は大事な教育の一環と再認識しました。
- 3) チューター制度の実践については、先輩（経験者）のロールモデルが影響し、後輩自身もロールモデルを目指すチューターの存在について情報交換がありました。これは教員ではない「学生」同士であるからこそ、生み出される現象であることが話し合われました。
- 4) チューター制度実践者側からはチューター達は自身のチューターの経験によって「コミュニケーションスキル」や「社会に出たら役立つスキル（社会人基礎力（すべてでなくとも））」が身についたとのコメントがよく聞かれるとのことで、確かに人材育成としてのなんらかの効果がある可能性が示唆されました。
- 5) チューターは教員とは立場が違うため、支援者はもっと気軽に質問できることなど、ピア・チューター（ピア・ラーニング）の特色が実際の現場で見られることも情報交換されました。
- 6) チューターが互いに学びあい、支えあうための「チームワーク」のようなものが生まれるスペースとして、チューター同士集まれる「チュータースペース」の存在価値についても情報交換されました。さりげなく「仲間」と集まるスペースがあり、そこで話すたわいない会話から、チュータリングスキルの話であったり、それぞれの悩みを打ち明けたり、自然にピア・ラーニングが生じやすくなる傾向がある可能性について話し合いました。
- 7) 実践で課題となるのが、学部生の多忙なスケジュールを調整し、チューター全員の一致したトレーニングの日程を組み込んでいくことはやはり難しいとの意見でした。
- 8) チューター達の個性によっては、指導がとても難しい学生も存在するが、そのような学生をどう指導するかについても今後の課題という意見もありました。

活発な意見交換というよりも、実践現場の情報交換に近いセッションとなりました。チューター達は確かに学習支援の経験を通して、社会で役立つスキルを得ていると感じてい

ること、そして学習支援というコミュニティの中で、互いに学び合い、自身のより高い成長の刺激を受けていることが共通点として浮かび上がりました。今後はこれらの適切な測定、評価法を応用した研究を発展させることで効果的なチューター育成の開発の大きな可能性を感じるセッションとなりました。参加された皆様のご意見とご協力を心より感謝申し上げます。ありがとうございました。